生誕100年記念

須田剋太展

生命の讃歌

２００７年4月２８日（土）～6月２４日（日）

主催／会場　うらわ美術館

関　連　資　料　リ　ス　ト

編集･発行

さいたま市図書館

生誕１００年記念
須田剋太展　生命の賛歌

関連資料リスト

２００６年の須田剋太生誕１００年を記念して、うらわ美術館で「生誕１００年記念　須田剋太展　生命の賛歌」が開催されます。それにあわせてさいたま市図書館では、須田剋太の魅力をより多面的に紹介できるよう、須田剋太および須田剋太が挿絵を担当した司馬遼太郎『街道をゆく』に関する資料をリストとしてまとめることにいたしました。このリストが皆様の須田剋太に親しむ契機となることを、そして美術館にお越しの方は図書館へ、図書館にお越しの方は美術館へ、足をはこぶ一助となることを願ってやみません。

さいたま市図書館

目次

須田剋太の作品と人
2
須田剋太のいた浦和
6
はてしなく広がる「街道をゆく」の世界をゆく
8
いろいろな「街道をゆく」
10
美術と司馬遼太郎
12
街道を旅する
14

＊　掲載した資料はさいたま市図書館所蔵のものです。
＊　本リストの資料の情報は、書名、著者・画家、出版社、出版年の順で記述しています。
＊　資料が貸出中または最寄りの図書館に所蔵がない場合は、予約・取り寄せができます。
　　図書館の職員にお申し出ください。

須田剋太の作品と人

須田剋太の本

図録や著作、評伝から、須田剋太の芸術や人物に触れてみましょう。

私の曼陀羅　須田剋太の世界　**須田剋太／編　光琳社出版　1984**

須田剋太７８歳のときの自選画集。作品図版だけでなく、自作の詩や、司馬遼太郎をはじめとする知人たちによる賛辞を収録。

須田剋太展　ほとばしる生命・画業50年　**朝日新聞社　1992**

須田剋太没後、埼玉県立近代美術館にも巡回した回顧展のカタログ。戦前の作品から、抽象画、書、そして『街道をゆく』挿絵原画など、作品を一望できます。ほか論考（美術：木村重信、尾崎信一郎、書：有田光甫による）、年譜、著作・文献リストを収録。

原画集街道をゆく　**須田剋太／画　朝日新聞社　1981**

『街道をゆく』で使われた挿絵をカラーで紹介。司馬遼太郎による須田剋太論「出離といえるような」（『微光のなかの宇宙』に再録）を収録。

須田剋太『街道をゆく』挿絵原画全作品集　第１－４集

須田剋太／画　近畿建設協会　2000

『街道をゆく』で使われた挿絵の全てをカラーで収録。木村重信による追悼文や加藤勉などによる文章も収録されているほか、それぞれの「道」ごとに解説とカラー写真、地図がついています。

埼玉県立近代美術館収蔵品目録　別冊　須田剋太作品

埼玉県立近代美術館／編集　埼玉県立近代美術館　1989

吹上町（2005年10月鴻巣市に編入）出身の須田剋太は、平成元年故郷である埼玉県の近代美術館に油彩、グァッシュあわせて２９３点を寄贈しました。それにあわせて編まれた収蔵品目録。

私の造型　**須田剋太／著　大阪書籍　1984**

雑誌などで発表された文章に書下ろしを加えた文集。まえがきで司馬遼太郎が「須田剋太さんの文章は、ご自身もおっしゃっているように、文章日本語としての共通性を欠いています」と述べている文体が魅力の一冊。内容は、理論的なものから奈良を詠んだ短歌、さらには料理雑誌に寄稿したエッセイまで幅広いものですが、通して読むとそこに通底する個性的な思想がみえてきます。

私は、活造りの魚がまだピンピンはねているのなど、食べる人の気がしれません。野蛮です。牛肉でも、さしみでも、牛や魚が生きているままでは、オブジェになりません。そのものの日常使用機能価値や、植物的標本図のままでは、オブジェになりません。この材料を精神で断絶したところに、料理は生まれます。　**「料理造形」p.210**

真珠の小箱６　伊勢・志摩の秋冬　**角川書店／編　角川書店**

1980

奈良や三重県の文物を季節ごとに紹介するシリーズの一冊。俳人の山口誓子、歌舞伎研究の郡司正勝、作家の森敦や杉本苑子にまじって、須田剋太は三重市街から４０キロのところにある滝原宮（たきはらのみや）について語っています。

独特老人　**後藤繁雄／編著　筑摩書房　2001**

後藤繁雄による「老人」達へのインタビュー。多くの著名人に混じって須田剋太も取り上げられていますが、このとき彼は８２歳。「造形っていうのは生きてることの証し、生きてることそのものなんです。私が造形なんです」(p.259)という言葉にかわらぬ個性がうかがえます。

西岡天香は説教者でしょ。まあ牧師みたいなもの。ところで、私は画家でしょ。私には作品しかない。天香さんの言葉を借りれば、私は私のために描くのでもなければ、他人のために描くわけでもない。私は作品そのものになりきるんだと。その作品が宇宙そのものになっちゃったら、もうそれでいいんだと。それが造形、最高の論理でしょう。流（政之）君は、「須田君はすぐ理屈を言う」と会えば言うけど、だけど私はそうじゃないと思う。理屈なしに描いてたら行きづまる。　**p.253**

画狂剋太曼陀羅　須田剋太伝　**加藤勉／著　邑心文庫　2003**

須田剋太のうまれた吹上町（現・鴻巣市）で活動している須田剋太研究会の加藤勉による評伝で、須田剋太の生涯がいきいきとつづられています。今では入手しにくい文献の全文掲載や親交のあった人々の証言など、須田剋太に関する情報に満ちており、研究の成果の豊かさが感じられます。大部の本ですが文章は読みやすく、須田剋太を知るには最適の本です。
特に浦和に住んでいた頃をつづった「混沌」「模索」「自立」の章は、別所沼で蛇を捕まえて食べていた話や国道を壊してアスファルトを持って帰ろうとした話など、風変わりで突飛な行動がユーモラスに描かれていて、須田剋太という人物の魅力あふれるものになっています。

須田剋太に接した人々

須田剋太は長い生涯のあいだ、作品・人物ともに、様々な人々に愛されてきました。そんな須田剋太への思いをつづっている本を紹介します。

河童が覗いた５０人の「仕事場」　**妹尾河童／著　文芸春秋 1986**

妹尾河童が著名人の仕事場を取材したシリーズで、須田剋太のアトリエも取り上げられています（このアトリエは阪神大震災で失われてしまいました）。乱雑で有名な須田剋太のアトリエをイラストレーターでもあった妹尾河童が克明に再現。曰く、描くのがたいへんで「参りました」（p.69）とのこと。この力作がこの本の表紙に使われています（1997 年出版の文庫版では野坂昭如の部屋）。須田剋太もこの取材は楽しんだようで、「この『上から覗く』というアイデアは、傑作中の傑作だ！」（p.70）と述べています。

日々の絶筆　**井上有一／著　芸術新聞社 1989**

井上有一は書家。須田剋太と親しく、須田剋太も雑誌に井上有一論を寄稿しています（『画狂剋太曼荼羅』に収録、pp.317－322）。この本はそんな井上有一の文章をその没後にまとめたもので、『私の曼荼羅』に収められていた「化け瓜や白隠鉄斎須田剋太」を収録しています。わずか１ページながら、末尾の「白隠、鉄斎、須田剋太を日本三怪といったらどうか」（p.247）という言葉が印象に残るエッセイです。

私の小さな美術館　**新井満／著**　**文芸春秋 1996**

作家新井満の美術品のコレクションにまつわる２４の「物語」のうちのひとつが、須田剋太が東大寺を描いた一幅の掛軸にまつわるもの。かつて住んでいた神戸の思い出、この掛軸を入手したいきさつ、そして森敦とのエピソードへと「物語」は広がります。

通崎好み　**通崎睦美／著**　**淡交社　2004**

マリンバ奏者で「アンティーク着物コレクター」の通崎睦美によるエッセイ。そのなかで通崎は、幼い頃両親につれられて須田剋太に自分の姿の絵を描いてもらっていた思い出を語っています。「お正月には、必ず須田剋太さんに描いてもらう。そのうちそれが、うちの年中行事のようになる」（p.59）通崎家には死の２年前まで須田剋太から年賀状が届いており、それも含めた図版が掲載されています。ファンの目から見た須田剋太の姿を垣間見せてくれます。

まごころ　**鶴見俊輔、岡部伊都子／著**　**藤原書店　2004**

同世代の２人が、ひとの生と死について明るく優雅に語っている対談の記録。「須田剋太さんというのは、驚くべき人だったんですよ」（p.62）といって鶴見俊輔が語る須田邸訪問のエピソードは、須田剋太という人の魅力を伝えてくれます。

風韻　**藤本巧／写真　鶴見俊輔／文**　**フィルムアート社**　**2005**

写真家藤本巧の写真に鶴見俊輔が文章を書いた本で、須田剋太も被写体になっています。アトリエで絵を描いているところと粘土で形をつくっているところの写真が収められています。

中井桂子の楽しい風景と絵手紙教室　**中井桂子／著**

日貿出版社　2005

絵手紙の書き方の本。「手習い」と同時に、よい作品を見ること「目習い」を強調する著者は、須田剋太の絵のすばらしさを随所で語り、その模写に挑戦しています。須田剋太に関する本としては異色ですが、須田剋太という個性がどのように受容されてきたかを考えさせてくれます。

須田剋太のいた浦和

須田剋太と交流のあった浦和の文化人

須田剋太が浦和に移住したのは高校卒業後の昭和２年(1927)のこと。昭和16年(1941)に関西へ移住するまでのあいだを浦和で過ごしました。ここではその時代に浦和で親交のあった文化人に関する資料をご紹介します。

埼玉の画家たち　**水野隆／著**　**さきたま出版会**　**2000**

元埼玉県立近代美術館副館長の著者による埼玉県ゆかりの画家を紹介した本。幕末・明治の橋本雅邦らにはじまり現在も活躍する画家まで一望できます。

開館記念展１　浦和画家とその時代　**うらわ美術館／編**
うらわ美術館　**2000**

２０００年に開館したうらわ美術館の開館記念展の図録。須田剋太の作品も出展されています。旧浦和市ゆかりの画家を図版とともに知ることができます。

◆　寺内萬次郎（洋画家　1890-1964）

１９３４年（昭9）、たまたまみた須田剋太の絵に着目、光風会への出品にさそいました。翌年須田剋太は光風会展で入選します。

寺内萬治郎画集　**寺内萬治郎／画**　**日動出版部**　**1971**

寺内萬治郎展　**埼玉県立近代美術館／編**　**読売新聞社**　**1985**

◆　四方田草炎（よもだそうえん）（日本画家　1902−1981）

１９３１年（昭6）ごろ、須田剋太は友人であった草炎の別所沼の画室の隣りに移りすみ、アトリエをかまえました。

四方田草炎素描集　**四方田草炎／画**　**高沢学園**　**1987**

四方田草炎デッサン集　永遠の画学生 双書美術の泉
四方田 草炎／画　**岩崎美術社**　**1990**

◆ 林倭衛（しずえ）（洋画家　1895-1945）

アナーキスト大杉栄との交流など、波乱に富んだ人生をおくった画家。１９４１年（昭16）から別所稲荷台に居住、晩年をすごしました。

林倭衛　　**小崎軍司／著　　三彩社　　1971**

◆ 神保光太郎（詩人　1905-1990）

別所沼時代の須田剋太と親交のあった詩人の神保光太郎。１９３９年（昭14）には須田剋太をモデルにした「湖畔の人」という詩を書いています（「幼年絵帖」『神保光太郎全詩集』所収）。

神保光太郎全詩集　　**神保光太郎／著　審美社　　1965**

ヒアシンスハウスに夢を託して　立原道造と神保光太郎

さいたま文学館／編集　　さいたま文学館　　2005

詩人立原道造は、親しくしていた神保光太郎を訪ねてしばしば浦和に足を運ぶうち、この地に小さな別荘を建てることを夢見るようになります。それが「ヒアシンスハウス」と呼ばれる建物です。立原は実際に建築事務所ではたらく本職の建築家でもあり、この「ヒアシンスハウス」の設計も自ら行っていました。結局この夢は実現しないままに立原は病没してしまいますが、立原が残した多くの資料をもとにして２００４年「ヒアシンスハウス」は別所沼公園に再現されました。この「ヒアシンスハウス」は、別所沼に集った多くの芸術家たちの記念碑であるといえるでしょう。
この本はその「ヒアシンスハウス」にまつわる立原道造と神保光太郎の資料の展覧会の図録です。

はてしなく広がる「街道をゆく」の世界をゆく

２５年にわたる超長期連載

文章・司馬遼太郎と挿絵・須田剋太のコンビで連載がはじまった『街道をゆく』。この仕事は須田剋太にとっての転機となり、司馬遼太郎への感謝の意を須田剋太自身明かしています（「司馬さんと旅して」『司馬遼太郎全集』第 49 巻月報　文藝春秋、1984　所収）。このコンビは 90 年の須田剋太の死の前まで続き、その後は桑野博利、安野光雅が挿絵を担当しました。「週刊朝日」の 1971 年 1 月 1 日号から 1996 年 1 月 19 日号、連載回数はなんと 1147 回。単行本や文庫にしてもずらりと並ぶ４３巻、どこから読んだらいいか迷ってしまうほどの量です。
そこでまずは、その広い世界の案内役となる、こんな本たちを手にとってみるのはいかがでしょう。

ガイド街道をゆく　西日本編／東日本編／近畿編　**朝日新聞社　1983**

『街道をゆく』の文章に地図と写真、用語解説を添えて構成。

司馬遼太郎『街道をゆく』人名・地名録　**朝日新聞社　1989**

人名・地名についての記述を集め、五十音順に配列した「読める索引」。年表・総目次・諸道図もあり、あらゆる角度から『街道をゆく』にアプローチできます。

司馬遼太郎の遺産「街道をゆく」週刊朝日別冊　**朝日新聞社　1996**

各界の著名人が語る司馬遼太郎の思い出と彼のライフワーク『街道をゆく』の総括。全足跡地図、全４１巻カタログあり。須田剋太と一緒に旅行中の写真も。

司馬遼太郎の風景　全１１巻　**ＮＨＫ「街道をゆく」プロジェクト著**

日本放送出版協会　1997－2000

「街道をゆく」の舞台の「現在」を取材し、司馬遼太郎の文章を味わいながら、その思考の足跡をたどったＮＨＫスペシャル『街道をゆく』シリーズを、取材者の視点から再構成して書籍化。

＊　**さいたま市図書館で所蔵しています**
ビデオ：ＮＨＫスペシャル全 13 巻　1998、ＮＨＫ新シリーズ全 12 巻　1998
ＤＶＤ：ＮＨＫ新シリーズ全 12 巻　2004

司馬遼太郎がわかる。 **アエラムック　朝日新聞社　2000**

作家や学者たちが、さまざまな立場から司馬遼太郎を語っています。作品名を地図上に示した「司馬遼太郎地球をゆく」や、できごとと作品を網羅した「司馬遼太郎年表」では、あらためてその仕事量に驚かされます。

「司馬遼太郎・街道をゆく」エッセンス＆インデックス

単行本・文庫版両用総索引　**朝日新聞社　2001**

各テーマに沿った記述を全巻から抜き出してまとめた「エッセンスの巻」と、街道名一覧・地域別に分類された章名一覧・各種索引からなる「インデックスの巻」、さらに書誌や年賦などの付録もついて、『街道をゆく』のすべてを網羅したデータベース的１冊です。

司馬遼太郎　旅のことば　**朝日新聞社　2002**

『街道をゆく』全巻から印象的なことばを数行ずつ選びテーマ別に構成。

司馬遼太郎が発見した日本　『街道をゆく』を読み解く

松本健一／著　朝日新聞社　2006

『街道をゆく』を通して司馬遼太郎が書こうとした日本のかたちとは。シリーズ全巻を分析し解説しています。

大きさいろいろ『街道をゆく』

◆　**単行本　全 43 巻　朝日新聞社　1978－1996**
雑誌初出時には毎回 2 点の挿絵がついていました。その挿絵を本文共に掲載。

◆　**朝日文庫（朝日文芸文庫）版　全 43 巻　朝日新聞社　1978－1998**
各章とびらで挿絵を 1 点掲載。

◆　**『司馬遼太郎全集』 47－49 巻、55－65 巻　文藝春秋　1984－1999**
挿絵なし。

◆　**ワイド版　朝日新聞社　全 43 巻　2005－2006**
挿絵なし。関連写真掲載。

「街道をゆく」いろいろな

歴史の旅人　司馬遼太郎

『街道をゆく』以外にも、司馬遼太郎は数々の紀行文を残しています。ただ漫然と旅をすることは決してなく、いつも目的地の歴史・文化への深い関心をもって訪れ、その文章は紀行文の体裁を取りながらも、必ずすぐに歴史的考察へと「寄り道」するのが常です。

（ほとんどの旅に同行した、みどり夫人の言葉）
「あの人はね、ほんとに旅が好きだったのかな…。私、変だなって思ったのは、何か無目的に旅をするってことがないんですよ。何かを調べにいくという目的がないと行かないのね。いわゆる旅好きな人というのは無目的でも好きなわけでしょう。やっぱり、仕事と全部結び付けてのことだわ。自分の興味の対象があるところでないと嫌なんですよね」『司馬遼太郎の風景』 1　p.12

歴史を紀行する　　**文芸春秋　1976**

高知、会津、滋賀…日本の中でも、風土の特徴が歴史になんらかの影響をあたえている土地を選び語ります。『街道をゆく』連載開始直前の歴史紀行。

長安から北京へ　　**中央公論社　1987**

長安、洛陽、北京…時代ごとに中国の中心となってきた都市をめぐり、歴史や政治・思想についての考察を深めます。

アメリカ素描　　**読売新聞社　1986**

アメリカ行きの誘いに、始めは「わけのわからぬ国」「冗談ではない」と「乗り気でなかった」著者ですが…。西海岸から東海岸まで、各都市を丁寧に旅して現地の人々と対話し、掘り下げた、司馬遼的アメリカ文化・文明論。

司馬遼太郎のテムズ紀行など　　**日本放送出版協会　1986**

司馬遼太郎が明治論を語るシリーズ番組「太郎の国の物語」のフォト・ドキュメント。

＊関連書籍『明治という国家　上下』 日本放送出版協会　1994

人間の集団について　ベトナムから考える　　**サンケイ新聞社 1973**

『坂の上の雲』の取材・執筆中に思いを馳せていたベトナムを訪れ、その民族性を通して、ベトナム人・日本人・アメリカ人…さまざまな“集団”について考えます。

歴史の舞台　文明のさまざま　　**中央公論社 1984**

ユーラシア大陸の中央を東西に緑の帯のように断続してのびる草原地帯。
少年時代からの憧れであった天山山脈周辺を旅して、少数民族の暮らしや歴史に触れ、そこから中国・韓国・日本・アラブ…と視点を移していきます。

草原の記　　**新潮社 1992**

「花」という意味のチベット名前を持つモンゴル人通訳、ツェベクマさんと共にモンゴルを旅した司馬遼太郎。歴史に翻弄された彼女の数奇な人生を軸に、モンゴルの歴史を語ります。

＊関連書籍『星の草原に帰らん』B･ツェベクマ／著　鯉淵信一構成･訳　1994

司馬遼太郎と美術

画家・司馬遼太郎？

産経新聞記者時代、美術担当だった司馬遼太郎。作家になってからも、『微光のなかの宇宙　私の美術観』としてまとめられたような、美術について記した文章が少なくありません。さらには、絵を描くこともなかなか得意だったようで、色紙や、『アメリカ素描』『韃靼疾風録』などの表紙や挿画を描いています。『街道をゆく』では病床の須田剋太に代わって『オランダ紀行』の挿画を５ヶ月近く担当しました。

（須田剋太が病に倒れ、さしあたっての連載分の挿画をどうするかというとき）
司馬さんは言った。
「もし『週刊朝日』がほかの人に依頼したら、それだけで須田さんはがっかりしてしまいます。僕が描くよ」
何というアイディアだろうか。（…）さっそく病室の須田さんに伝えた。
「お帰りになるまでは司馬さんが描くことになりました」
須田さんのほっとした微笑を今もよく覚えている。

「「街道」で教えてもらったジャーナリストの仕事」村井重俊
『司馬遼太郎がゆく』　プレジデント社、2001　所収、　p.256

小生の絵について、申しあげます。
あれは、須田さんから頼まれたものでした。須田さんは、病中ご自分の“場”が他の画家にとられる（？）のがいやだったのでしょう。げんにそうなれば、須田さんが癒ったからといって、復帰しにくくなります。その心中を察して、小生は、素人絵を描いたのです。雑誌にかぎってのことです。素人の絵なんか、絵じゃないんです。絵は、素人がどんなにうまくても、玄人にかないません。玄人が上手ということでなく、何十年も、手をうごかして描いているのです。その累積のちがいです。これは、決定的です。

『司馬遼太郎からの手紙』　朝日新聞社、2000　p.39

長安から北京へ　　**中央公論社　1976**
アメリカ素描　　**読売新聞社　1986**

それぞれ、表紙と扉の画が司馬遼太郎によるものです。

韃靼疾風録　上・下　　**中央公論社　1987**

表紙画のほか、本文中に手書きの解説地図が多数挿入されています。

司馬遼太郎のテムズ紀行など　　**日本放送出版協会　2001**

口絵に、「オランダ紀行」の挿画２枚がカラーで掲載されています。

司馬遼太郎が考えたこと　１－１５　**新潮社　2001－2002**

司馬遼太郎のエッセイ集。各巻の表紙に、司馬遼太郎が色紙やスケッチブックに描いた画が用いられています。収録されているエッセイも、須田剋太についての『原画集街道をゆく』に収録された「出離といえるような」（11 巻、『微光のなかの宇宙』にも収録）、「真の自在」（14 巻）、「二十年を共にして－須田剋太画伯のことども」（同、『以下、無用のことながら』文藝春秋、2001　にも収録）のほか、美術についての言及が多くされています。

須田さんとモンゴルに行ったのは、この人が六十七歳の八月でした。

ウランバートルのホテルで須田剋太画伯の訃報をきいたとき、私は自分があと数週間で須田さんの当時のとしに達することに気づきました。

涙がこみあげてくるのをおさえて、かたわらにいた亜細亜（アジア）大学のモンゴル学の教授である鯉淵信一氏に、鯉淵さん、あのときの須田さんのどんなお姿を覚えていますか、とききました。鯉淵さんは当時、大学を出て、留学生としてここにきていました。

「ホテルの玄関前の石段に横ずわりになられて街のスケッチをしておられたのをおぼえています」

「二十年を共にして－須田剋太画伯のことども」

『司馬遼太郎が考えたこと』１４　新潮社、2002　所収　p.388

微光のなかの宇宙　私の美術観　　**中央公論社　1984**

司馬遼太郎による美術についての文章を集めたもの。取りあげられるのは、ゴッホ、空海、須田国太郎ら、司馬遼太郎が既存の価値観にとらわれることなく選んだ作家たちです。『原画集街道をゆく』におさめられていた須田剋太論「出離といえるような」も収録されています。単行本のほか文庫版もあります(中公文庫、1991)。

街道を旅する

街道のガイドブックをご紹介

『街道をゆく』にちなんで、街道のガイドブックをご紹介します。ガイドブックを片手に、実際に「街道をゆく」のはいかがでしょう。

日本の街道ハンドブック　「旅ゆけば心たのしき」街道小事典

竹内誠／監修　　三省堂　2006

人を運び、物を運び、文化を運び、情報を運ぶ…日本全国にある街道の歴史と解説。

県別全国古街道事典　東日本編／西日本編　　**みわ明／編**

東京堂出版　2003

編者が実際に全国各地の街道を歩き、その成果を県別にまとめた本。

完全踏査古代の道　正／続　　**木下良監修･武部健一／著**

吉川弘文館　2004

道路技術者の立場から、実際に走破し、駅路と駅家を網羅して解説。

探訪日本の歴史街道　　**楠戸義昭／著　三修社　2004**

道なくして歴史はありえない。五街道の宿場や名所にまつわる人間ドラマから、街道が歴史に果たしてきた役割を探ります。巻末に街道用語解説あり。

日本再発見　道　１・２　　**同朋舎出版　1991**

日本各地の街道を、５０人の作家がそれぞれ訪れ、歴史や人物について自由に語ったエッセイ集。写真も豊富です。

文化庁選定歴史の道百選　森田敏隆写真集　　**森田敏隆／著**

講談社　2002

平成八年に「最もすぐれた歴史の道」として文化庁が選定した全国七八か所の街道・運河を撮影し、解説を添えた写真集。

＜　ご案内　＞

生誕100年記念

須田剋太展　生命の賛歌

2007年4月28日(土)－6月24日(日)

観覧料:一般　600円(480円)　大高生　400円(320円)　中小生　200円(160円)
＊　( )は団体料金
＊　リピーター割引:観覧済の有料チケットの提示で、次回が団体料金になります。
(観覧日より1年間、1名様、1回限り有効)
休館日:月曜日(4月30日は開館、5月1日は休館)
開館時間:午前10時－午後5時／土･日のみ午後8時まで(入場は閉館の30分前まで)

うらわ美術館

住所:〒330－0062
埼玉県さいたま市浦和区仲町2－5－1
浦和センチュリーシティ3F
電話:048－827－3215
http://www.uam.urawa.saitama.jp/

さいたま市図書館のご案内

- **資料を借りる際には図書館利用者カードが必要です。市内在住・在勤・在学の方、および相互利用協定を結んでいる市町村（上尾市、伊奈町、戸田市、蕨市、川口市、春日部市、蓮田市、川越市）に在住の方ならどなたでもカードをお作りいただけます。住所の確認できるものをご持参ください。なお、館内での利用の場合は不要です。**
- **資料の貸出はおひとり各館１０点まで、２週間です。**
- **図書館によって休館日、開館時間が異なります。ご利用の前にご確認ください。**
- **館内ＯＰＡＣ（資料検索端末）やインターネットからでも予約･取り寄せができます。ご希望の方にはパスワードを発行しておりますので、図書館窓口にお申し出ください。**

さいたま市図書館

http://www.lib.city.saitama.jp/
http://www.lib.city.saitama.jp/m/